

少雨に対する農作物の栽培管理について

平成28年6月3日
農業技術課

1 作物

(1) 水稲

- ・ 水利条件が悪い地域では、関係者で配水計画を立て、計画的な配水に努める。
- ・ 徒長して根の発育が悪い苗が散見される。除草剤による葉害を防止するため、活着を確認してから除草剤を散布する。また、多くの除草剤の成分では、気温が29度以上になると葉害が発生する場合があるので、高温時には散布を控える。
- ・ 高温により雑草の生育が早いので、登録の範囲内で早めに散布する。
- ・ 未熟有機物の分解が進み、強還元状態になりやすくなる。ガスによる根腐れを防止するため、ほ場に入るとガスの発生が多いほ場では、一度干してガス抜きをする。

(2) 麦

- ・ 水田転作などかん水可能、かつ明渠設置や畝立播種を行ったほ場では、うね間かん水を行う。ほ場全体に行き届いたら、直ちに排水する。
- ・ 生育不良や既に黄化しているほ場では、枯れ上がりを助長する恐れがあるので、かん水は行わない。
- ・ 平年より7～10日程度生育が進んでいるので、生産者及びオペレーターに対して、刈取りチャートを参考に適期刈り指導を行うこと。ライスセンター等乾燥調製施設の稼働開始について、関係者で協議すること。

2 果樹

(1) かん水と土壌管理

- ・ かん水可能な果樹園は、早めにかん水を行う。かん水間隔の目安は、概ね5～6日とする。
- ・ 全面かん水が困難な場合は、樹冠下の根域を中心に部分かん水を実施する。
- ・ 水分の競合を防ぐため、草生園では下草刈りを、清耕園では除草を兼ねて浅く中耕を行う。なお、樹冠下に敷きワラ等のマルチを実施し、土壌水分の保持に努める。

(2) 生理障害対策

- ・ 少雨により土壌が乾燥すると、りんごやぶどうなどにホウ素欠乏症などの生理障害が発生しやすくなる。かん水を行うとともに、必要に応じて葉面散布を行う。

(3) 病虫害防除

- ・ 本年は、りんごの腐らん病、うどんこ病の発生が多い傾向で、アブラムシの発生も各地で見られている。今後乾燥が続くと、ハダニ類やアザミウマ類などの発生も心配されるので、適期防除に努める。

(4) りんご、なし

- ・ 生育が早いので、平年の同時期に比べて肥大は良好である。しかし、結実が良好で摘果が遅れた園では今後乾燥が続くと、肥大不足が懸念される。すみやかに摘果作業を進める。

(5) もも

- ・結実全般に良好である。今後、硬核期を迎えるため、基本に準じて摘果作業を進める。

(6) ぶどう

- ・まだ、花穂整形が終わっていない園では、時期を逸しないよう作業を進める。なお、有核「巨峰」で作業が間に合わない場合には、全ての新梢の花穂を整形するのではなく、結果母枝単位で整形する房数を決めるなどして、園全体に整形作業を行う（例 1 結果母枝につき、強い新梢と中庸な新梢と弱い新梢を選び、各新梢1～2花穂のみを整形する）。
- ・無核栽培は、開花状況をよく観察し、第1回ジベレリン処理をむやみに遅らせないように適期に行う。

3 野菜

(1) かん水と土壌管理

- ・定植時に土壌が乾燥している場合は、定植時の植穴かん水や定植後株元かん水を行い、活着を促す。また、主に葉野菜類でかん水可能なほ場では、午前中を中心にスプリンクラー等でかん水を行う。
- ・水田転換畑のアスパラガス等でかん水可能なほ場では、うね間を中心にかん水を行う。
- ・乾燥が続いたほ場では、短時間の降雨では土壌表面が湿る程度で生育に必要な水分が供給されないので、降雨の状況を見ながらかん水を行う。

(2) 生理障害対策

- ・ハクサイ、セルリーの心腐れ症、トマトの尻腐れ果などの生理障害が発生しやすいので、カルシウム等の含まれた微量要素肥料の葉面散布を行う。
- ・レタスは干ばつ後の降雨や高温などによって肥効が高まり、タケノコ球やタコ足球など変形球が出やすいので、むやみな追肥は行わず、適正な草勢を保つようにする。

(3) 病害虫対策

- ・乾燥状態では、アブラムシ類やハダニ類、アザミウマ類の発生が多くなるので、適期防除に努める。

4 花き

(1) かん水と土壌管理（露地花き）

- ・少雨傾向により、草丈やボリュームの不足が懸念されるので、土壌水分が不足している場合は上部かん水やうね間かん水を行う。
- ・かん水ができないほ場では、敷きワラやマルチ等を行って土壌水分の保持に努める。
- ・定植を予定しているほ場で、ほ場全体へのかん水が難しい場合は、植え溝もしくは植穴にかん水して苗が老化しないうちに植え付けを行う。

(2) キク

- ・定植後の著しい乾燥は、活着及び生育不良の要因となるので、ほ場の状況によりかん水を行う。また、乾燥防止対策として敷きワラ等を行い、土壌水分の保持に努める。

(3) りんどう

- ・新植ほ場では、定植後の著しい乾燥により活着が遅れ生育不良となるので、上部からのかん水を行い活着を促す。
- ・据置ほ場では、土壌水分を確認し、必要に応じて通路かん水を行なう。しかし、過剰なかん水や長時間の滞水は、根腐れを起こす原因となるので注意する。

(4) シンテッポウユリ

- ・新植ほ場では、定植後の著しい乾燥により活着が遅れ生育不良となるので、上部からのかん水を行い活着を促す。生育状況に応じて1,000倍程度の液肥を施用する。

(5) 害虫防除（露地および施設）

- ・高温、乾燥状態が続くとアブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ、ダニ類等の発生が多くなるので、害虫防除の徹底を図るとともに、ほ場周辺の雑草防除対策にも努め、害虫の飛来、侵入防止を行う。

5 畜産

(1) 牧草

- ・刈り取りは10～12cmのやや高刈りとし、再生力が悪くならないようにする。
- ・刈取り後の予乾は水分の低下が早いので、乾き過ぎないように注意して反転し、ロールベール・ラップの作業を行う。
- ・水田転換畑等で、かん水が可能な飼料畑ではかん水に努める。

(2) 飼料用トウモロコシ、ソルガム等

- ・既に播種したほ場では、かん水のできるほ場はかん水に努める。
- ・これから播種する場合は、通常より1cm程深くすると共に鎮圧を実施して発芽を促す。